



7月 園だより

令和3年7月

段原みみょう保育園

「アッ、動いた動いた!」「えさ、食べた食べた!」と生き物が動く度に声を上げる子、お友だちをかき分け一番前でケースに張りつくように見る子、正座をして静かにじーっと見続ける子…4階踊り場の『生き物ひろば』は子どもたちの大人気スペースです。保護者の方が、「オカヤドカリ」や「モリアオガエルのオタマジャクシ」を持ってきてくださったり、職員が準備したりなどで、現在5つの飼育ケースが並び、「小さな命」を毎日みんなで見守りながら、大切に飼育しています。

命とのふれあいを通して



昨今の高度情報通信ネットワークの進展や電子メディアの発達によって、日常生活がより便利になる一方で、子どもたちが有害な情報に容易に触れてしまったり、ゲームの種類によっては、のめり込み過ぎると、命はリセットできるという仮想と現実が、混同してしまうこともあるのではないかとされています。実体験が豊富でない子どもたちが、このような世界に入り込み過ぎることなく、現実の世界で、人と人が触れあい、自分の思いを表現しながら相手の思いも知ろうとする（思いやる）ことが、本当に重要です。

当園では、“『^い生命を大切に』人や物を大切に”を目標に掲げています。「命は大切である」と大人は誰しも言葉にし、子どもたちへ伝えていかなければいけないことですが、言葉だけでは実感に伴わず、伝えることが難しいのが現実です。

例えば、生き物を飼育する中で、どのようにしたら生き物が住みやすい環境になるのか、病気にならないようにするにはどうしたらいいのかななどを深く考えること、新しい命が生まれる喜びや、残念にも死んでしまった時に悲しみを感ずることなど、これらによって感性が刺激され、心が動く体験となり、自然や生命への畏敬の念が培われていきます。また、家族がお子さんに対し、「あなたのことを愛しているんだよ。」と心から思うことで、おさんは「自分は大切にされている」という実感を得、自分の存在が価値あるものだという自信(=自尊感情、自己肯定感)をもつことができます。その感情が「命は大切」と思う土台となり、生きる喜びに繋がっていくのです。

また生きていくために、私たちは、多くの命をいただいています。五感を使って様々な食材を味わいながら、食べるという行為を通して命の大切さを知り、食べ物や作り手に感謝の気持ちが持てるようにすることも大切ではないでしょうか。

さて、オタマジャクシはそろそろ手足が生え揃い、カエルになろうとしています。カエルは生きた昆虫を餌とするので、保育園で飼育するには大変難しさがあります。カエルたちを自然界へ返すのか、はたまたこのまま保育園で飼うのか、子どもたちと真剣に話し合っていきたいと思います。

最後に「命の大切さ」を教えてくれる絵本を何冊か紹介します。

* 「うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん」 作・絵：ディック・ブルーナ

* 「あかちゃんのうまれたひ」 作・絵：浜田 桂子

* 「ぼくからみると」 作：高木仁三郎 絵：片山 健

* 「ずーっとずっとだいすきだよ」 作・絵：ハンス・ウィルヘルム

* 「わすれられないおくりもの」 作・絵：スーザン・バーレイ

是非ご家族で
読んでみてください。

園 長